

保育者養成校の音楽教育に関する研究

—— 基礎技能及び学外実習に対する意識調査を通して ——

三好良枝・黒瀬久子

A Study on How to Give Music Education on the Kindergarten Teachers
—— Through the Inquiries about Understanding of Fundamental Technical Skill
and of Practices Outside the College ——

Yoshie Miyoshi and Hisako Kurose

1. はじめに

前回の「保育音楽指導に関する—考察—実習に対する音楽意識調査を通して」^{注1}にも示したように、約1年半の基礎的な学習を積んだのち、実習に臨む学生に、学習意欲を喚起させたいと考えた。さらには実習を通して幼児に直接、触れることにより幼児の音楽教育に対する意識がどのように変化するかを指導する側の我々が把握し、今後の指導のあり方を検討する資料にしたいと考え、アンケート調査を実施した。その結果、自己評価としては実習前よりも実習後の方が全体的には高い評価を示しているものの、質問項目を個々に検討してみると、実習を通して幼児と音楽の関連の把握、また教材研究や指導方法の大切さを感じるとともに、音楽技能を修得することが現場の指導に不可欠であることを痛感していたようである。そこで今回は学生自身、音楽の基礎技能をどのように考え、とらえているか、またそれと実習との関わりを調査し、前回に引き続き検討を加え、今後、さらに指導の改善を計りたいと考えている。

2. 調査方法

調査対象 下関女子短期大学保育科

2年生45名

調査時期 (1)基礎技能 1984年5月上旬

(2)学外実習

実習前 1984年5月中旬～下旬

実習後 1984年9月下旬

調査内容

(1)基礎技能に関して

幼稚園教育要領の「音楽リズム」及び保育所保育指針の「音楽」のねらいに掲げられている基本方針をもとに保育の音楽を学習する上で必要と考えられる基礎技能がどの程度、修得できたと意識しているかを調査した。5段階による自己評価、5をできる、以下、4（だ

いたいできる)、3 (ふつう)、2 (すこしできる)、1 (できない) として回答を求めた。

(2)学外実習に関して

㊸保育者として必要な音楽の指導技術並びに幼児音楽に関することがら。

㊹学内での音楽教育の中で役立つと思うことがら。

㊺ピアノの進度及び音楽指導との関連。

㊸については基礎技能と同様に5段階による自己評価。㊹㊺については選択肢による回答を求めた。

3. 調査結果及び考察

(1)基礎技能の自己評価

質 問 項 目		自己評価の平均値				
		5	4	3	2	1
1	いろいろな歌を楽しく歌う					
2	歌の感じを表現しながら歌う					
3	子どもにはっきりと聞こえるように歌う					
4	音程やリズムを正しく歌う					
5	発声、発音に気をつけて歌う					
6	曲にあったテンポで歌う					
7	童謡の音域が楽に出る					
8	ピアノ等の伴奏なしで歌う					
9	いろいろな曲を楽しくピアノで弾く					
10	曲の感じを表現しながらピアノで弾く					
11	音やリズムを正しく弾く					
12	童謡を初見で弾く					
13	曲にあったテンポで弾く					
14	リズム楽器を正しく使う					
15	リズム楽器の特徴を把握					
16	強弱に気をつけて楽器演奏をする					
17	リズム楽器を曲にあったテンポで演奏する					
18	グループでリズム合奏を楽しむ					

基礎技能の意識調査に対する自己評価の平均値は図1に示す通りである。全体的にはピアノに関して質問した項目についての平均値が低く、その中でも童謡を初見で弾くことには特に低い平均値を示している。また、初見で弾くこととも関連があるが音やリズムを正しく歌ったり、ピアノを弾いたりす

図1 基礎技能の平均値

ることができるかというソルフェージュに関しての質問に対しても低い評価となっている。現在、本学においては入試に実技試験を実施していないため、ピアノの未経験者もあり、学生の実技レベルの差が激しい。また、高等学校時代に音楽の選択をしていない学生も全体の27%を占めているのが現状である。こういったことがピアノやソルフェージュに関する評価が低い原因と考えられる。歌を楽しく歌ったり、合奏を楽しんだりするなど自分自身が音楽を楽しみながら表現することにはかなり高い評価を示している。しかし将来、保育者となり指導する立場になることを考慮すると楽しく表現できる裏付けとなる基礎的な能力がしっかり修得されなければならないと考えられる。我々養成校側においてもこの点を重視した指導を今後も続けていきたいと考えている。

(2)実習前後における自己評価

○ 5段階評価（調査項目(1)~(12)）の平均値

質問項目	自己評価の平均値
1 子どもを見ながらピアノを弾く	2.5
2 童謡の伴奏	2.5
3 即興で簡単な伴奏をつける	2.5
4 マーチ・スキップ等動きのリズムを弾く	2.5
5 実習のために童謡を20曲程度練習	2.5
6 童謡を5曲程度暗譜で歌い弾き	2.5
7 あいさつの歌・生活の歌を練習	2.5
8 子どもにはっきりと聞こえるように歌う	2.5
9 ピアノ等の伴奏なしで歌の指導	2.5
10 幼児用の楽器を正しく使う	2.5
11 リズム楽器を使った合奏曲に編曲	2.5
12 発達段階に応じた音楽の指導	2.5

—— 実習前 - - - - 実習後

5段階評価による回答の平均値は図2に示した通りである。実習前においては、基礎技能の調査と同様にピアノに関する項目の平均値が低い。さらに子どもを見ながらピアノを弾くことには増々自信がないようである。質問項目のなか

図2 実習前後の平均値

で特に低い自己評価となっているのは、実習のための準備として童謡を20曲程度練習できたか、に対してである。20曲という曲数の指定をしたための結果とも考えられるが、1年から実習に出るまでの教育内容、指導体制からすると、それ程大変な曲数とは考えられない。また5曲の暗譜についても同様である。しかしこの実習の準備に関する自己評価は基礎技能やピアノの進度に大きく左右されていると思われる。実習後における自己評価は全般に高くなっている。現在、本学においては6月中旬の幼稚園実習から始まる。保育園、施設実習をすませ9月の幼稚園実習まで、約3ヶ月近くの期間があり、その間実習先でのいろいろな経験を通して幼児の扱い方、指導の方法等に若干の自信とゆとりが持てるようになった結果と考えられる。しかしその反面、1つの園での実習が2週間という短期間であるため学生自身の性格や、技術的な問題から音楽指導を避けたり、また実習の時期や園自体の音楽教育に対する取り組みなどが学生の自己評価を大きく左右していることを考慮しなければならない。実習後において実習前より

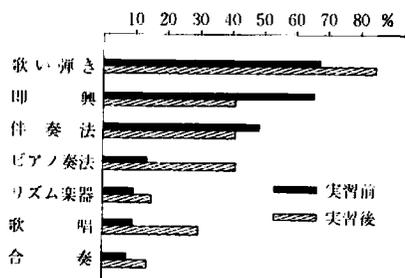


図3 実習前の教育で役立つもの・役立たなかったもの

も低い評価となったリズム楽器を使った合奏曲については実習期間中、その機会に恵まれなかったためか無回答の学生も多く、他の項目の評価とは同様の判断はできないと思われる。

○ 実習前の教育で何が役立つか、役立ったか
実習前の教育で何が役立つか、実習後には役立ったか（調査項目(13)）についての結果は図3に示した通りである。

実習前では歌い弾き、即興、伴奏法が高い比率を示している。実習後には歌い弾き、即興、伴奏法と実習前と同様の結果となっているが、ピアノ奏法と歌唱が実習後には特に高い伸びを示している。これは実習を通して基礎的な技能の重要性を認識した結果であり、この歌う、弾くといった基礎技能を重視した音楽指導が行われていたと推察される。質問項目の発声法、合唱については現在講義の中で特別に指導していないので他の項目と同じ扱いはできない。

○ピアノの進捗と音楽指導の関連

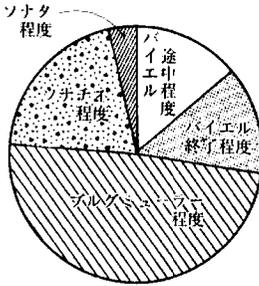


図4 ピアノの進捗

図4はピアノの進捗の割合を表わしたものである。実習に出るまでの時点でバイエルを終了していない学生が全体の27%を占めている。この学生の入学時にピアノの進捗調査を実施しているが未経験者が29%、またバイエルを勉強中の者が24%という結果がでている。この未経験者のうち、83%が依然バイエルを終了していないというのが現状である。保育園、幼稚園を対象に行ったアンケート調査^{注2}によると現場では、初心者が2

年間で達成できるピアノの進捗は、ブルグミュラー程度であるという意見が約50%を占めている。このことから、現場では幼児の音楽指導にその程度の基礎的なピアノ技術が必要だと考えていると思われる。この結果をそのまま養成校側の教育に取り入れることはできないにしても、入学時においてピアノの経験がない学生の指導には、今後十分な配慮をしていく必要があると思われる。

図5は「あなたのピアノの進捗で音楽指導ができるか」、実習後には「できましたか」に對しての結果を表わしたものである。(調査項目④) また、表1についてはその評価をピアノの進捗別に表わしたものである。

表1 ピアノの進捗と実習前後の評価

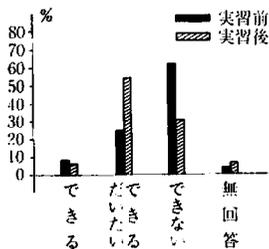


図5 音楽指導ができるか、できたか

ピアノ進捗	評価 実習	評価			
		できる	だいたい できる	できない	無回答
バイエル 途中	前	0	0	83	17
	後	0	33	50	17
バイエル 終了	前	0	33	67	0
	後	17	33	50	0
ブルグ ミュラー	前	5	27	68	0
	後	5	54	32	9
ソナチネ	前	22	22	45	11
	後	0	89	11	0
ソナタ	前	50	50	0	0
	後	50	50	0	0

単位 %

実習前は実習を目前にひかえた緊張と不安、また基礎技能に対する自信のなさが重なった

ためか「できない」と答えた学生は62%と全体の半数以上を占めた。しかし実習が終わってみると不安を感じていた程ではなく案外うまくいった、だいたいできたにとらえている学生が55%と実習前よりも30%増加している。この実習前よりも高い自己評価が結果として現れたことは実習が終わったという安心感からの心理的要素が大きいと考えられる。

表1からは、ピアノの進度が上昇するのに比例して「できる」と回答している学生が増えているのがわかる。すなわちピアノが弾けることが音楽指導もうまくできると考えているようである。逆に実習前に「できる」と答えた学生がわずかではあるが実習後において減少している。その減少がソナチネを弾いている学生に顕著に現れている。ピアノの技術や基礎技能にある程度の自信をもち実習に臨んだ学生が、直に幼児に接することによって、幼児の発達の理解や音楽との関連、指導方法、また教材研究の大切さなど、ピアノの技術のみではなく、他の要素も音楽指導に必要であることを身をもって感じとったようである。

表2 進度別自己評価の比較

自己評価 ピアノ進度	基礎技能(図1)	実習に関する項目(図2)	
		実習前	実習後
バイエル 途中	2.8	2.2	2.9
バイエル 終了	3.0	2.5	3.1
ブルグミュラー	2.9	2.7	3.2
ソナチネ	3.7	3.2	3.5
ソナタ	4.1	3.5	3.7

基礎技能(図1)と実習前後(図2)の自己評価の平均値をピアノの進度別に比較したものが表2である。基礎技能においても実習中の音楽指導の評価と同様にピアノの進度、上昇につれて平均値が高くなっている。だが勿論、ピアノの進度で

のみ基礎技能の程度を判断する訳にはいかない。現在、ピアノについては個人指導を行っているためその進度もはっきりしており、学生自身も自分の力量を確認することができる。しかし歌唱力については歌うことは誰にでもできると考えていることや、発声などに関する基礎的な個人指導を行っていないことから明確に自分自身の歌唱力をつかんでいないなどの点を考慮して今後の基礎技能のレベルアップに取り組む必要があると思われる。

次に実習前後の平均値を進度別に検討していくと、バイエル途中の学生で実習前後の平均値の開きが0.7、終了では0.6、ブルグミュラーで0.5、ソナチネ0.3、ソナタ0.2、とその差が少なくなっている。バイエルを勉強中の学生は実習を前に、基礎技能にも自信がなく大きな不安を感じ、終わるとその安心感のみで実習の評価をしたと考えられる。しかしピアノの技術にいくらかの自信をもっているソナチネ、ソナタ程度を弾いている学生は実習に対しての自分の力を冷静に判断し、また実習後の評価も適切であったと考えられる。ピアノ技術の上達は音楽指導にゆとりと自信を持たせる要素となっていることを示している。

基礎技能と実習前後の自己評価をピアノ進度別に比較してみると、進度の低い学生が実習後に高い評価を出しており、逆に進度の高い学生は基礎技能の評価より低くなっている。進度の低い学生は心理的影響を受けやすく、実習が終わるとその安心感が評価を高くしているようで

ある。しかし、ソナチネやソナタを弾いている進度の高い学生は基礎技能にも自信をもち実習に対するとらえ方、取り組みも冷静であると思われるが幼児に接し基礎技能だけでは音楽指導が十分にできないことを体験し、低い評価となったと考えられる。全般的に実習後の評価が高くなっている傾向にあるが進度の低い学生が基礎技能より高い評価を示していることが大きな問題点であろう。

4. まとめ

- (1) 基礎技能において、ピアノに関しての自己評価が全般的に自信がなく低い。自分自身が音楽を楽しむことはできるが、その表現に必要なソルフェージュの能力に欠ける。これらの基礎技能の修得に今後尚一層の努力を重ねる必要がある。
- (2) 実習に関しては、前回の調査とほぼ同じような結果であったと思われるが、実習は学生にとって現場の保育に接する貴重な機会であるから、成果のある実習となるために事前の準備に対する指導内容並びに指導方法の検討が必要だと考える。
- (3) 保育現場においては、歌う、弾くといった基礎的な能力を必要とする指導が大部分を占めていることを実習の体験から感じとったためか、実習後、ピアノの基本的奏法、あるいは歌唱といったものが大きい伸び率を示している。基礎技能の修得の必要性を学生自身、はっきりと認識した結果といえる。
- (4) 実習に出る時点で全体の約半がバイエルを終了できていないことから考えて、入学前にピアノ経験のない者への指導を検討していく必要がある。
- (5) 実習における音楽指導の自己評価は、ピアノの進度に比例して高くなっている。つまり学生はピアノが弾けることが音楽指導がうまくできるととらえている。しかし、実習を体験することによって、確かにピアノ技術の上達は音楽指導に不可欠の要素となるが、導入のしかた、指導方法、教材研究、そして何事にも意欲をもって取り組む保育者としての姿勢など他の要素も大切であることを身をもって知ったようである。
- (6) 基礎技能も実習前後の自己評価の平均値もピアノの進度にあわせて高くなっている。ピアノ技術の上達は学生の基礎技能、あるいは実習に関する評価にも心理的影響を及ぼしているようである。

以上のことから今後の課題としては、ピアノの基本的奏法の上達に力を入れると同時に歌唱力に関しても基礎的な発声の指導を行うなど、伴奏に頼らず、音程を正しく歌う力をつけることが必要であると考えられる。こういった基礎技能の向上は実習における音楽指導に自信を持たせ、かつ将来に向けて保育者になる自信ともつながってくるであろう。また、幼児と接する機会の少ない学生は実習で新しく経験することが多く、幼児の扱い方、その指導方法等に苦慮している点が多いようである。幸い、本学においては付属幼稚園もあるので、幼児に直に触れる機会をより多く与え、本実習が成果のあるものとなるよう、今後この点についても検討してい

く必要があると思われる。

5. おわりに

高学歴化時代の影響は幼児の世界にも例外なく押しよせてきているようであり、幼児に対する音楽教育においても益々エスカレートしつつあるのではないかとと思われる。発表会のための演奏等、幼児の発達段階や能力的観点からみても明らかに背伸びしているような取り組みも見られる。

本来、幼児教育の一環としての音楽教育とは、発達、発育段階を踏まえた豊かな情操を培うためのものである。しかし現在の幼児の音楽教育はややもすると周囲の大人達が自分達の目的や手段として使っている気配すら感じる。このことは我々幼児の音楽教育に携る者として、冷静にとらえ、反省し、さらに今後の研究課題として取りあげなければならないだろう。

順調に育つ幼児達の生活のリズムを大切に、幼児期でなければできない音楽教育、幼児のための音楽を求め、心にふれる感動的な音楽環境をつくるよう努力する必要があると考える。

保育者養成の音楽教育を担当する我々の責任は重大であり、今後の課題として慎重に検討し努力しなければならない。

尚、本論は日本保育学会第38回大会において山口県内の私立短大3校で合同研究し発表した
が、そのうち本校の学生についての調査結果を再検討してまとめたものである。

【参考文献】

注1 「保育音楽指導に関する一考察 ― 実習に対する意識調査を通して ―」

下関女子短期大学研究紀要第2号 (1983)

注2 「保育者養成校の音楽指導に関する一考察(その3) ― 現場が求める保育者の音楽技能 ―」

日本保育学会第38回大会研究論文集 P.454～455